

心あまりてことばたらず

土田龍太郎

一・

去年こぞの春もの言ひかはせし二條の后を慕ひて在原業平朝臣の詠めるなる

月やあらぬ春や昔の春ならぬ

わが身ひとつはもとの身にして

てふ一首、伊勢物語に見え古今和歌集にも入りたれば知らぬ人としては世に多かるまじ。紀貫之の古今集假名序にて世にいふ六歌仙おのおのに評語を加へたれど、業平につきては右の歌をも引きつつ

その心あまりてことばたらず、しばめる花のいろなくてにほひのこれるがごとしと云ひてとぢめたり。

おのれ先にもはら餘情よせいてふことにかたよせて假名序の業平評を論へり。世々のかしこき歌人の餘情うたじとを尚びきたれること、もしまことに貫之のこの業平評に起り、忠岑公任を経て俊成の唱へし幽玄に至れりとせば貫之の功いさをしおぼろげならず。げに月やあらぬの一首、本末とほりがたきまでにことばたらはねば餘情ただならざるは否むべくもあらぬはさることなれども、さはれ一首のいみじきことただ餘情のみに託かこちてやみなむはいともかたほにてくちをしかるべし。

一一・

業平そもいかなる思ひを一首にこめたりや、註釋のたぐひをけみするにその解きやうさまざまにて

月が去年の月と異なるか、春が去年の春と異なるか。——年々に變るまじき月、年毎に異なるまじき春を捉へて儚くもこれを疑ひたるあはれなる響きいとど言外にあふれたり。

といへるあり、また

今日この月を見るに去年とはいたく異りて、その影のあはれに悲しく覺ゆることはいぶかしさよ。おもふにこれは月が去年の月と異なるか、はたまた春が去年の春とは異なるか、このふたつの中の何いづれかに依るならむ。

といへるあり。さらに、

月は昔のままの月なり、春も昔のままの春なり。しかるに我身ひとつのみは昔のままの身ありながら昔のやう様にもあらぬことよ。

といへるもありて、いづれあたりや一つに定むべくもなし。人ごとに解きやういたくたが

へればくさぐさの釋義ここにさながらまねび列ねむもえうなかるべし。されどとりあへずは、月も春もまたわが身も去年言ひかはせしわが戀ひてやまぬ妃の今はけはひだになくなりぬればすべて變りはてぬる心ちぞする、てふ意にとらばかつはおだしからむ。

かくたらざることを一首のここかしこにつぶさに補はばこそともかくもあらめ、さらではおほかたのおもむきだに聞えがたきままにてやみなませばおぼつかなきことよなし。かくことばたらぬは業平の咎と見なすまじきはいふもさらなり。ことばたらねばこそ時の移ろふのくすしくあやしきこと、さらに妃を慕ひてやるかたもなき思ひのいとどせまりくるなれ。また業平のことばをわざと省きてことさらおぼめきたるにてもあらず。ひたぶる心のいかにともしづめがたきにまかせてよそ人にえしも悟りがたき一首のおのづと口ずさまれしなるべし。

三.

易繫辭傳に

書不盡言言不盡意

と孔子の曰へるはげにさることにて、書と言と意とひしとうちあはでかたみにたがへるところのあるをぞつねとすべき。かくたがひめの残れるはさらに書言の罪にてはあらず。たがひめをよすがとしてなにとやらむくすしきはたらきの出でくなれば、ここにて孔子の説けるおもむきはや詩歌文章の本義を仄めかしむるにたれば、業平などかしこき歌人の入れる大和歌の奥處おくがを尋ねむときのよきしるべともやなりなむずるぞかし。

四.

貫之の古今假名序もて始まれるやにおぼゆる世々の歌論のたぐひいとあまた今に傳はりてただ數へむにもいとなかるめれど、在五中將のころあまりてことばたらざるさかひをさらにきはめむとほりせむときにわきてたよりあらむずるは、近き世に富士谷御杖のものをし論考にほかなかるべし。この主の言語ぬしと和歌さらに神道にわたれる典くさぐさありて眞言辨まことのべんそのきはみなれど、今はむねと神明憑談しんめいひよだん——可牟我加里かむがかりとも——の一書につきてその教説をあらあら辿りみるべし。

御杖の説けるにしたがへば、大和歌の心とことばのうちあはざるはゆめ過ちなりと思ひなすべからず。うちあはぬこそ歌のまことにかなひたるなれ。

全體歌はきこえぬが歌の本意なり。よく聞ゆるは、皇國風みくにぶりにあらず。いかにといふに歌はもとあらはにいはれぬ事をいふもの也。神武紀に以諷歌倒語掃蕩妖氣倒語之用始起乎茲とあるこの倒語わが御國の詞のつかひやうにて神武天皇の御時よりはじまれる大規範なり

と云ひてさらに

すべて歌はわがいはむと思ふ所には必なき物也云々 そのいはむと思ふ所のかたはらをもとむれば却て詞は自由にありてそのいはんと思ふ所をいひしよりも心よくこもりて詞はある物なり。

とも云へれど、げに業平心あまりてことばたらざるにまかせて、いはむと思ふところをただあらはには謳うたはでかたはらにはづれたることをのみ言ひて月やあらぬの一首をものせるにたれば、その一首すぐには聞えぬ歌になりおほせたり。これ御杖の唱ふるまことの皇國風によくかなひて見ゆるぞいとおもしろくまたかしこき。

しかはあれど御杖の論あげつらひいかなるかたにつけても業平の歌にひしとかなへりとしもおもほえず。月やあらぬの一首さながら諷歌倒語の例なりといちはやく思ひ定めむはなかなか危はらふかるべし。そも神武紀にては道臣命密しつひのおほみこと策うけたまはを奉りて諷歌倒語をもつて妖氣わざはひを掃蕩はらひしことばかり記して、道臣命の御詠をさらに引くことなくてやみぬれば、この諷歌倒語いかなるものなりしや今知らむにたえてすべなければ心もとなきままにやむほかなし。また神明憑談にては言靈にも言ひ及べれど、業平の詠歌にはや言靈宿れりやいなやいともいぶかし。

そはともかくもあれ、心あまりてことばたらざる業平詠草のことさらに心長く倦まず尋ねゆかではあるべからず。かくねもころに尋ねゆかむに、右にあらあ述べりし富士谷御杖の和歌論こよなき輔けなるべければ必ずゆるがせにすまじきことばかりは疑ふまじきにこそ。

(令和八年六月二十五日受附)